

○渡邊 理香 氏（平成 8 年、娘（当時小学校 1 年生）を交通事故で失う）

[要旨]

娘の事故と判決、情報を与えられない当時の状況

平成 8 年 7 月 18 日、夏休みを 2 日後に控えたその日、集団下校中の子供たちの列に、糖尿病の持病を抱えた加害者の車が意識もうろうとした状態で突っ込み、当時小学校 1 年生だった娘、祥子を直撃して死亡させ、もう一人の児童にも大けがを負わせるという事故が起きました。搬送先の病院で、事故からわずか 2 時間後に、娘はあまりにも短い 6 歳という生涯を閉じました。

事故発生後間もなく、事故現場に着いてしまった当時小学校 3 年生だった息子は、血だらけで倒れている妹が救急車で搬送されていく姿を見てしまい、現場に落ちていた妹のランドセルを胸に抱きしめながら、「ひかれたのは自分の妹だ！」と泣き叫んでいるところを、近所の方が保護し自宅へ連絡をくださったのです。

娘は、青信号で手を挙げ横断歩道を渡っていたところを一方的に殺されたにもかかわらず、加害者が病気であったために一旦は不起訴になりました。しかし私どもが検察審査会へ申し立てを行った結果、加害者は奇跡的に逆転起訴され、事故から 4 年ほどたった平成 12 年 3 月 3 日に、禁錮 1 年 8 か月執行猶予 3 年の判決が下ったのです。そしてこの日は、生きていれば 10 歳を迎えるはずだった、娘の 10 歳の誕生日その日でした。

犯した罪に対しては軽過ぎる判決だと思い上告を願いましたが叶わず、それ以上私どもにはどうすることもできなかったのです。当時は事故の知らせさえ警察から入ることはなく、事故状況や加害者の処分についても、何一つ被害者に知らされることはありませんでした。そのため、加害者が不起訴処分が終わっていたことも分からず、検察からの事情聴取をただひたすら信じ待っていました。情報の入らない中、自分たちで手探り状態の中で調べ、事故がなぜ起きたのか、そして今自分たちがしなければならないことは何なのかを必死で探す日々を強いられたのです。

突然の事故で大切な家族を失ったとき、家族だけでその過酷な状況を受け止めるのは困難な状況となります。今から 20 年ほど前被害者は置き去りの状況で何をどうすればいいのかさえ分らず、私は自分自身のこともよくわからなくなり、家族のこと、子供のことを考えられる状態では全くありませんでした。PTSD、心のケア、被害者支援、そういった言葉さえも全くなかった時代、私はその必要性も何も分からずに、何一つ、残された息子たちに手を差し伸べてやる事が出来なかったのです。

危険な通学路、一方的に奪われる命

祥子は兄（当時小学 3 年生）と弟（当時 2 歳）の 3 人きょうだいの真ん中で一人娘でした。子供たちは本当に仲が良く、いつも 3 人じゃれあうようにして遊んでいたのです。娘は小学校に行くのがと

でも楽しみで、毎日嬉しそうに通っていました。娘のランドセルが楽しさで飛び跳ねるように揺れていたのを今でも覚えています。

子供たちが通っていた通学路は、国道と並行した朝晩の交通量が大変多い道路で、雪が降るとさらに子供たちの歩くスペースが狭くなり大変危険な状態となります。子供たちの命を守ってくれるのは、縁石だけです。今この縁石は長くしっかりしたものになっていますが、これは娘の事故後に取り換えられたものです。事故以前は、欠けていたり小さい縁石がほとんどでした。娘が1年生になったとき、私は学校の役員として、通学路の安全点検を行い改善を各関係機関にお願いしたのですが、危険な通学路はここだけではないということで、なかなか整備はされませんでした。しかし、娘の事故後間もなく、縁石は付け替えられ側溝の蓋も直されていったのです。近所の方からは、「祥ちゃんのおかげで通学路がきれいになった。」と言われました。横断歩道を渡る娘が直撃された事故現場は、現在は頑丈なガードレールが取り付けられ道幅も、通学路も広がっています。私はこの事故現場に20年経った今でも、近づくのさえもつらいのです。

娘が小学校に入る前、就学前の子供たちを対象にした交通安全教室で、道路の渡り方チェックをするラリー大会に娘と参加しました。当時私は交通安全教室の地区リーダーとして先頭に立ち、子供たちに交通ルールを守ることの大切さを伝えていました。そのため、娘も人一倍がんばって交通ルールを学び守っていたのです。しかし娘は、交通ルールを守り、「ここを渡れば大丈夫だよ」と私が教えた横断歩道、その通学路の横断歩道上で命を奪われてしまいました。「自分の命は自分で守ろう」、これは入学したときに学校からのお便りに書かれていた言葉です。しかし、どんなに気を付けても事故は起きます。そして命を一方的に奪われてしまう状況が、娘の事故のときも、悲しいことに今現在も起きているのです。

事故後の長男の様子

事故のことを感じていないかのような行動が見られていました。友達と元気に遊んでおり、以前と変わらない様子で学校に通っていたように思います。テレビ番組を見て笑っていた姿も覚えています。事故後、特に子供たちに変った様子はないと感じていたので、子供だから、妹が亡くなったことをあまり分かっていないのかなとさえ思っていました。

ただ、兄弟間の変化は感じていました。長男は次男と6歳年が離れていたもので、それまでは弟が何をしてもあまり怒ったことはなかったのですが、事故後は些細なことでもめることが多くなったように思います。クッション役の妹が突然なくなったせいかもしれません。長男から、「弟とけんかするな」と言われたことが嫌だったと、最近になって告げられました。

また、私に対して大変気を遣っていたのは感じていました。例えば、弟が救急車の出ているテレビ番組を見ていると慌ててテレビを消したり、事故後すぐの夏休みに学校のプールから帰宅した長

男が「祥ちゃんが事故現場に座っていたから、僕一緒に学校に行って、その後ちゃんと一緒にお家に連れて帰ってきたからね。」と言ってくれたことがあります。

事故当日、搬送先の病院で娘になかなか会わせてもらえずに待たせられていたとき、私は椅子に座っていることも呼吸することもままならないような状態になっていきました。長男は、そんな私の肩を抱き締めながら、「救急車に乗せられて祥子が連れて行かれるとき、僕は『祥子』って叫んだんだ。そしたら祥子は『お兄ちゃん』で答えた。だから絶対に大丈夫だ。」と言いながら、私をずっと支えてくれたのです。

事故後、四十九日を過ぎたある日のこと、息子が「あのときの言葉、よく考えたら間違っていた。祥子が救急車に乗せられたとき、最後の最後に『お母さん』って、祥子はお母さんのこと呼んだんだよ。」と言ってくれたのです。今思うと、当時の私は祥子の所に逝きたいとそのことばかりを毎日考えている状態で、そんな私をそばで見ていた息子は、何とかしなければという思いで私にこの言葉をかけたのだと思います。事故数日後に届いた娘のランドセルの中を確認したところ、どれほどの出血をしたのかすべての教科書が娘の流した血でどす黒くびしょりとぬれていたのです。そんな凄惨な事故現場を息子はその目で見てしまったのです。そのときの衝撃、悲しみはどんなに大きかったか、つらかったか計り知れません。しかし当時の私は、その息子の気持ちにも気づいてやることも出来ませんでした。息子の言葉は周りが全く見えなくなっていた私に、つらい思いをしているのは自分だけではない、悲しい思いをしているのは自分だけではないということを感じさせてくれるきっかけとなったのです。

事故から 20 年ほど経ち、息子と話をして知ったこと

事故の年の夏、これから夏休みに入るつもりで学校に行き「夏休み終わっちゃったの？」と先生に聞くと、「どうしたの？ もう夏休みは終わったでしょ。」と先生に言われ、ものすごくショックで、悲しかったということがあったそうです。長男には、その年の夏休みを過ごした記憶がなかったのです。

また、「学校の外側から校舎を見ている自分がいて、外はとても明るく日差しもまぶしいほどなのに、祥子のいた 1 年生の教室のある 1 階だけは異様に暗く恐ろしい感じがして、とても怖かった、今でも思い出したくないほど恐ろしい感じがする。」と話してくれました。そんな夢を事故後たびたび見ていたそうです。

そのほか、事故後しばらくの記憶がまるで鍵が掛けられてしまったように、思い出そうとしても思い出せないと言っています。その後、事故から 1 年半ほど後に生まれた弟の誕生時からだと記憶がつながっているのだそうです。

私は、妹の死を目の当たりにしてしまった息子に、生命の誕生の瞬間を体験させたいと思い、私

のお産に当時小学校5年生の息子を立ち合わせました。「頭が出てきた、耳が見えた、お母さん頑張れ！」分娩室で息子は大はしゃぎでした。そして生まれてきた弟を見ながら「かわいい、かわいい！」と喜んでいたので記憶しています。

きょうだいを亡くした子供のへの支援として望むこと

今回息子と初めて事故のことについて話をし、表面的にはショックを受けていないように見えても、かなり傷ついていたということを非常に感じました。事故後の子供の行動や言葉に対して、学校の対応として担任の先生だけではなく、他の先生方からも注意を払っていただき、気になることがあれば連絡をいただきたいと思います。「おはよう。今日はよく眠れた？」「最近何か気になることはある？」「何か心配事はない？」などの声かけにより、話しやすい雰囲気をつくっていただきたいと思います。「心配なことがあったら聞かせてね。私はあなたが頑張っているのを知っている。心配してるんだよ。」ときちんとした言葉で子供が分かるように伝えてほしいと思います。そう話をしていただけることで、心のよりどころが出来るのではないのでしょうか。「つらくてどうしようもなくなったら、自分には行ける場所がある。話せる人がいる。」そう感じることもとても大切で必要なことであり、それはその子の心の砦になると思います。

また、当時2歳だった下の息子の歯が事故のショックで、すべて虫歯になってしまっていたのですが、そのことに私は気づくまでかなり時間がかかってしまいました。治療していただいた歯医者さんから「幼い子供は何か強いショックを受けると一瞬にして歯が虫歯になってしまうことがある。」とそのとき教えられたのです。自分の気持ちを言葉として表現できない幼い子供に関しては、体の細部にわたって注意していただければと思います。本来ならば親が気にかけてやらなければならないことなのですが、事故後の状況では自分のことさえもよくわからない状態のため、周囲の方々が子供へのサポートをしてくださることによって、その親御さんも社会とのつながりを保つことができているように感じ、孤立無援感を味わうことがなく、親子ともどもつらい時期を何とか過ごすことができるのではないかと思います。

子供を亡くした親への支援として望むこと

学校行事への参加の際、私は鉄の鎧を身につけなければ学校に行けないような精神状態になっていました。保健室の先生など、またはその日動ける先生がそばに寄り添ってくださったならと思います。とにかく被害者を孤立させない、独りにしない配慮をお願いしたいと思います。まるで腫れ物に触るかのように接したり、そっとしておく方がよいと遠ざけたりせずに、事故についてあまり深く触れずに被害者自らが話をし始めたら聞いていただき、それまでは、「体の方は大丈夫？」と少しの配慮をいただいてそばにいてほしいと思います。被害者となり、様々なものを失いました

が、友人と普通に何気ない会話をする事さえも奪われてしまったことが非常に悲しく感じました。普段の会話をし、信頼のおける方にそばにいてもらえていたなら、どんなに救われたらうかと今も考えています。

学校側でも、事故への正しい理解と配慮に努めていただき、その上で被害者の了解が得られれば、PTAの方々に事故状況の正しい説明をしていただきたいと思います。被害者の身近にいる人に対しては、こういう形で接するのがよいですよ、というアドバイスや接し方への留意点など専門家の方(スクールカウンセラー等)から教えていただくことも必要かと考えます。

あやふやな情報で被害者を傷つけないためには、やはりきちんとした情報を周囲の方々に知っていただくことが必要だからです。私は事故状況がそのとき全く分からなかったのですが、ある日知人が訪ねて来て、「祥子ちゃんは横断歩道で傘を落としたんだって。そしてその傘を取りに行っただけでひかれたんだって。」という話をされたのです。事故の日の朝、私が娘に傘を持っていくように言ったのです。その話を聞きその知人が帰った後、「私が娘を殺したんだ」という思いに駆られ立ち上がることができない状態となりました(後日そのような事実はないことが判明しました)。周囲の方にはせめてあやふやな情報は、被害者を苦しめてしまうことがあるということだけは分かっていたらいいと思います。

卒業式や入学式への参加についても配慮をいただければと思います。せめてもの願いとして、「子供が生きて証を残したい、他の子と同じ経験をさせてあげたい」という親心がありますので、その件の連絡をいただけると嬉しいと思います。たとえ参加できなくても気にかけていただいていることを知ることが大切なのです。何も知らされない、何も伝えられないというのは、忘れられてしまっているようで非常に悲しく感じてしまいます。ただその伝え方も難しいとは思いますが、受け取る側への心情への配慮をお願いできればと思います。

相談窓口の紹介を話すことの必要性の説明も含めて伝えていただき、できるだけ親と子とそれぞれに話せる場所の提供をお願いしたいと思います。また、同じような体験をした方と話せる機会も、親子それぞれに教えていただきたいと思います。

皆さんのお手元の資料の中にある『たった1人のあなたへ』という詩ですが、これは事故から3年近く過ぎた頃、息子の担任の先生から「子供たちにお母さんの言葉で命の大切さを伝えてほしい。」というお話があり、当時の気持ちを先生のお力を借りて文字にしたものです。この詩を書くことによって、自分の心の整理が少しずつですが、ついていったように思います。今振り返ってみると、そのときの自分の気持ちを書き残しておいたことは本当によかったと感じています。